

## 中世末期における聖性の収集・記録・伝達—フランシスコ会厳修派を中心に—

木村容子

本報告では、15世紀のフランシスコ会厳修派説教師 Bernardino da Siena (以下、BS) と Giovanni da Capestrano (以下、GC) の事例を通して、説教師の聖性が構築される過程に焦点をあてた。1450年のBSの列聖は厳修派にとって初めての聖人誕生であり、その後の厳修派の聖性を方向づける事件でもあった。まず報告では、GCをはじめとする厳修派修道士たちが、BSの死後に彼を厳修派説教師の理想的なモデルとすべく、伝記や説教という文字や声のレベルで、あるいはBSの遺体の管理という聖遺物のレベルで、BSの聖性を収集・記録・伝達していく過程に着目した。次に、BS列聖の経験が次の厳修派聖人として期待されたGCの聖性にいかなる影響を与えたのか、GCの遍歴説教に付き従った同行修道士たちが執筆した伝記を検討した。報告全体として、BSからGCへの列聖運動の経過を「聖性の構築・横領・継承」という流れに沿って展開した。

### 1 聖性はいかに構築されるか—Bernardino da Siena (1380-1444)

1444年5月20日、中世イタリアを代表する名説教師 Bernardino da Siena がイタリア中部の都市ラーキアラで死去した。彼が属したフランシスコ会厳修派は、ただちにBSの列聖運動を起こす。運動の中心となったのは、BSの遍歴説教に付き従って説教術を学んだ Giovanni da Capestrano (1386-1456) である。厳修派初の聖人誕生に向けて、GCはBSの列聖を支持する教会関係者や世俗の権威、特にBSの出身都市であるシエナとBSが死去した都市ラーキアラと密接に連絡を取りながら、教皇に列聖審査の実施を強く働きかけ、聖年である1450年にニコラウス5世によってBSの列聖が宣言されるに至った。

BSの聖性が構築される過程には3つの特徴がみられる。第一の特徴は、フランシスコ会内部の問題である。すなわち厳修派と穏健派との対立が、厳修派がBSの聖性を構築するうえで決定的な影響を与えた。14世紀半ば以降、会則により忠実であろうとするフランチェスコ会修道士たちによって、観想・清貧をキーワードに隠修生活を送る厳修派が誕生する。15世紀になると、BSそしてGCを長とする厳修派は、観想的生の価値を認めながらも、説教と学問重視へと大きく方向転換して勢力を拡大していく。そのことが同じフランシスコ会の穏健派との対立をより深刻なものとした(厳修派の方向転換は厳修派内部にも反対派を生んだ)。こうした穏健派との摩擦のなかで、BSの死後、GCをはじめとする厳修派は、BSを「フランシスコ会の聖人」ではなく、「フランシスコ厳修派の聖人」として、その聖性を修道会の内外で訴えていくことになる。BSの聖性の構築は、厳修派のアイデンティティーの確立と不可分の関係にあったのである。

BSの聖性の構築にみられる第二の特徴は、俗人の積極的な関与である。列聖審査のみならず、列聖運動の一環である伝記作成においても、俗人が中心的な役割を担っている。BSの死後に最初に伝記を執筆したのは、BSと同郷で彼の説教の信奉者であったシエナ市民 Barnaba da Siena (=Barnaba Pannilini) であった(1445年)。他方、厳修派の上層部がBSの生前から死後の列聖運動を見越して組織的に動いた様子はみられず、死後に手探りの状態で対応していったようである。GCは、BSの俗人時代の情報不足を補うためにシエナ市民 Leonardo Benvoglianti に伝記の執筆を依頼し、そのBenvoglianti 作の伝記(1446年)を参考に自らBSの生涯を記録した(1447-49年)。こうした厳修

派として初めて体験した BS 列聖への道のりは、聖性の誉れ高い人物の聖性をどのように収集・記録・伝達すべきか、彼らに具体的な手続きを含めて多くのことを学ばせた。BS に次ぐ聖人候補 GC に対しては、後述のように、生前から列聖を念頭に置いた記憶の継承が共同体で強く意識されるようになる。

BS の聖性の構築にみられる第三の特徴は、説教を通じた聖性の伝達である。BS 列聖後、厳修派説教師たちは毎年 BS の命日 5 月 20 日に記念説教を実施しはじめる。彼らは上述の GC 作の伝記を参照しながら、説教を準備した。こうして BS の聖性は、伝記が流布するよりも遥かに幅広い層の人々に、各地での記念説教を通して浸透していった。厳修派にとって BS 記念説教は、「BS の聖性」を「厳修派の聖性」へと拡大し、厳修派説教の価値を人々に知らしめる絶好の機会であったといえる。

列聖から 10 年を経た 1460 年に厳修派を代表する説教師 Giacomo della Marca (1393-1476) が北イタリアのパドヴァでおこなった記念説教の記録は、直弟子による BS の説教術の貴重な証言となっている。Giacomo によれば、説教の構成における分割の仕方、言葉の選び方、さらに身振りといった言語外の要素において、BS は過去の説教師たちと異なり、民衆にとって明快で記憶しやすい方法で説教をおこなった。そうした聞き手の存在に配慮した BS の説教は、人々を改心させ、都市の平和回復や風紀の改善といった成果をもたらしたとされる。説教の革新こそが、厳修派が構築した BS の聖性の核にあった。

## 2 聖性の横領か、継承か—Giovanni da Capestrano (1386-1456)

BS の列聖を実現させた GC は、中欧での遍歴説教へと向かった。1456 年のベオグラード防衛の際にはオスマン帝国軍と闘うキリスト教徒を鼓舞して都市の防衛に寄与したとされるが、まもなく体調を崩し、1456 年 10 月に現クロアチアのイロクで死去した。BS の列聖運動から学んだ厳修派は、すでに GC の生前から彼の聖性を意識的に記録、死後の列聖に向けて準備していた。GC の晩年の中欧への遍歴説教に同行した厳修派修道士たちは、厳修派の上長に書簡を送り、GC の説教や奇跡の状況を詳しく報告している。

GC の死後数年の間に、厳修派上層部の意向により、彼ら同行修道士たちによって書かれた伝記が、少なくとも 3 点伝わっている。Girolamo da Udine 作(1457 年)、Nicola da Fara 作(1462 年)、Cristoforo da Varese 作 (1462 年頃ラテン語で執筆、1479 年イタリア語版・1523 年ラテン語版の出版)である。上述の BS の伝記との最大の違いは、GC の伝記が奇跡—その多くは病の治癒—の描写に多くの頁を割いている点であろう。なかでも Christoforo は、遍歴の日々での奇跡を執拗なまでに記録している。「気高きウィーンの町で、6 月 9 日、目の見えない者が 3 人、耳の聞こえない者が 5 人、麻痺患者が 4 人、身動きできない女が 1 人、20 年間聾啞の女 1 人が癒された」。翌日以降も、治癒したとされる者たちの病の症状と人数が黙々と記録され続ける。

同行修道士であった伝記作者たちにとって、GC の奇跡の記述には特別な意味があった。GC は BS の死後にその聖性を広めるために、BS の聖遺物を積極的に活用していた。伝記や都市年代記、説教の記録によれば、GC は説教の際に BS の帽子や血液を染み込ませた布を聴衆に示し、場を熱狂させて多くの奇跡を起こしたとされる。さらに GC は BS の聖遺物を常に携帯し、奇跡を期待して教会や修道院に押しかけた人々に対して、あるいは施療院を訪れた際に、BS の帽子で病いの者たちを祝福していた。したがって、BS 列聖の立役者であった GC 自身の聖性は、BS の聖性と不可分の関係に

あった。そこから、GCはBSの聖性を横領していると考える者たちも現れた。彼ら中傷者に対してGCの聖性の正当性を証明するために、伝記作者たちはGCの奇跡の叙述に注意を払ったのである。

「[Giovanni は]Bernardino が生きていたときから多くの印と奇跡をもたらしていた」(Nicola da Fara)。「しばしば病の者たちは、Bernardinoの帽子では治らず、Giovanniに触れられて治癒した」(Cristoforo da Varese)。

さらにGCの伝記(Nicola, Cristoforo)には厳修派の歴史を概観する章が加えられ、個人の伝記にとどまらず、厳修派の会史というべき性格が与えられた。それまで小規模な集団であった厳修派がBSとGCの時代に一気に勢力を拡大したことが、地理的拡大や修道院数の増加を通して語られる。すなわち厳修派はGCをBSの聖性の継承者と位置付け、伝記を「厳修派の伝統」を形作る場として活用したのである。Nicola作伝記の序文には、このことが比喩的に示されている。「(BSとGCは)咲き誇る二本のオリーブの枝、主の前で輝く星…彼らは崩れかけていたフランチェスコの家を建て直した。」

以上の点から、BSの事例で初めて列聖運動を経験した厳修派は、列聖審査の実際的な手続きを含めて、そこから多くを学び、続くGCの列聖運動において、厳修派のヘゲモニー確立という目的のためにより計画的・組織的に行動したといえるだろう。しかし、皮肉なことにGCの列聖運動は難航し、その列聖が宣言されるのは1690年、全く異なる歴史的な文脈においてであった。

では、なぜ厳修派が組織的に進めたGCの列聖運動が暗礁に乗り上げたのだろうか。まず、フランシスコ会穏健派出身のフランチェスコ・デッラ・ローヴェレがシクストゥス4世(在位1471-1484)として教皇に即位し、厳修派の第二の聖人誕生を望まなかったことが要因として挙げられる。さらに、そうした不利な状況を覆すに足るほどの俗人による運動が沸き起こらなかった点も影響したと考えられる。一般に、列聖運動においては、聖人・聖性を求める民衆(俗人)の願望と運動が重要な役割を果たす。しかし、民衆・都市民・君主による列聖の動きがあり、それに後押しされていたBSの場合と異なり、GCの場合、俗人は間接的に奇跡の受け手として登場するに留まっている。民衆の動きが見えなくなるのは、列聖運動が厳修派のヘゲモニー確立という政治目的のために用いられる「手段」と化してしまっただけではないだろうか。

GCの列聖運動が難航するなか、厳修派は列聖運動について方針を変更する道を選んだ。その後も上述のGiovanniのようなカリスマ的な説教師の死後に同行修道士が伝記を執筆することはあったが、厳修派が組織として厳修派説教師の列聖運動をおこなう様子はみられない。1470年代以降、厳修派は、ボナヴェントゥラやモロッコの殉教者たちの列聖運動へ関心を向け、これら「古い」聖人たちを厳修派と結びつけることを目指す。さらに世紀末には、反ユダヤ主義的な説教を通じて、トレントの幼児シモーネの列聖運動のような、それまでにないタイプの聖性の構築に関与することになるのである。